

円山派衣裳画と三井家小袖の研究  
Studies on Kimono Design Drawings by the Maruyama School Painters and on Kosodes  
Once Owned by the Mitsui Family

近藤 尚子\*<sup>1</sup>, 佐々木 丞平\*<sup>2+</sup>, 樋口 一貴\*<sup>3+</sup>, 田中 直人\*<sup>1</sup>, 岡島 奈音\*<sup>1</sup>  
Takako Kondo\*<sup>1</sup>, Johei Sasaki\*<sup>2</sup>, Kazutaka Higuchi\*<sup>3</sup>, Naoto Tanaka\*<sup>1</sup> and Nao Okajima\*<sup>1</sup>

\*1 文化女子大学文化ファッション研究機構 東京都渋谷区代々木 3-22-1

Bunka Fashion Research Institute, Bunka Women's University

3-22-1 Yoyogi, Shibuya-ku, Tokyo, Japan

\*2 京都国立博物館

Kyoto National Museum

\*3 三井記念美術館

Mitsui Memorial Museum

+服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化女子大学

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture,

Bunka Fashion Research Institute, Bunka Women's University

**Abstract :** The purpose of this project is to clarify the state of six sketches by Maruyama school painters and eighteen kosodes owned by the Mitsui family by using two methods, art history and philological history. This year, we carried out some investigations, researching the sketches and kosodes at Bunka Gakuen Costume Museum, confirming the history of the studies on Maruyama Okyo and Mitsui Echigoya, and interviewing about the history of those resources. The results of these researches indicate the possibility that the productive era of the sketches and kosodes are from the end of the Edo period to the Meiji period.

## はじめに

円山派衣裳画とは、1975年の段階において白畑よし・切畑健により26件の存在が確認されている小袖下絵群である[1]。三井北家10代当主高棟(1857~1948)より円山派7世絵師円山応祥(1904~1981)に譲られ、現在、大乘寺が19件を、文化学園服飾博物館が6件(No.4~6, 8~9, 13)を所蔵し、1件(No.7)は所在不明である。

大乘寺が所蔵する1件「波頭に飛鶴」図に「地紅地黒とも 圓山画大海水靄」との墨書があることから、制作には江戸~明治期に京都を中心に活躍した円山派絵師の関与が伺われる。円山派の始祖である円山応挙(1733~1795)の代表作である「雪松図屏風」(三井記念美術館蔵)が三井家に伝来することなどから、三井家が応挙のパトロン的な役割を務めたものと考えられており[2]、白畑は墨書の「圓山」を応挙および円山派に連なる絵師と解釈し、円山派衣裳画を応挙あるいは一門の作と推定している[1]。以降、『衣裳画』は応挙研究の文脈の中で言及されることが多いものの、絵師を確定するような具体的な論証はこれまでにない。

\*1) [kondo@bunka.ac.jp](mailto:kondo@bunka.ac.jp)

## 目的

本研究は、円山派衣裳画 26 件（表 1 に示し、以下『衣裳画』と呼ぶ）と、文化学園服飾博物館所蔵の三井家旧蔵小袖 47 件の内、『衣裳画』との関連性が伺える 18 件（以下『小袖』）を資料とし、①『衣裳画』そのものへの美術史的なアプローチと、②豪商三井家と四条・円山派絵師の接点への文献史的なアプローチを行うことで、『衣裳画』の美術史・服飾史における位置づけと、近世服飾が育まれた環境の特質について総合的に考究・解明することを目的とする。

表 1 衣裳画一覧

No	名称	所蔵
1	十二ヶ月風物図	大乘寺
2	観世水に藤、秋草図	大乘寺
3	八橋図	大乘寺
4	岩山に松鶴、亀図	文化学園服飾博物館
5	水流に小松、亀図	文化学園服飾博物館
6	昔ばなし図	文化学園服飾博物館
7	山もみぢ、秋草図	所在不明
8	竹に鶯図	文化学園服飾博物館
9	扇面流し図	文化学園服飾博物館
10	四君子	大乘寺
11	松樹	大乘寺
12	竹	大乘寺
13	竹	文化学園服飾博物館
14	梅樹と遠山と岩	大乘寺
15	籬に梅樹	大乘寺
16	梅樹	大乘寺
17	花筏	大乘寺
18	桧垣に四季の草花	大乘寺
19	桜、菊、もみぢ	大乘寺
20	藤棚に流水、山吹	大乘寺
21	瀧に岩	大乘寺
22	波濤に飛鶴	大乘寺
23	山水、飛鶴、亀	大乘寺
24	亀に亀甲文	大乘寺
25	遠山と流水	大乘寺
26	立涌に秋草	大乘寺

※衣裳画の番号及び名称は「三井家伝来圓山派衣裳画」に依拠した。

## 方法と結果

文化学園服飾博物館における『衣裳画』と『小袖』の実見調査により、画面の構成と奥行きという観点から、以下のような分析結果を得た。

『衣裳画』のうち、文化学園服飾博物館に所蔵されている Nos.4,5,6,8,9,13 の6件には、次を示す特徴があった。すなわち、多くの場合、袖と後身頃の絵柄の連続性よりも、前身頃と後身頃の連続性が強く意識された構成になっているものの、各々の筆勢や画面全体の把握方法には少なからぬ差異があるということがわかったのである。

具体的には、近景に岩山と群亀、中景に水面と松樹、遠景に遠山と鶴を配した蓬莱山の図様となっている No.4「岩山に松鶴、亀図」における、左前身頃と後身頃の連続性は単なる柄の問題に留まらない。前後の身頃を繋ぎ合わせた大画面の中央奥へと観る者の視線が収斂するよう、手前に扇状に広がる水面と縦方向の動線を強調する松樹、リズムカルに配された岩で奥行きを表した、画面構築に対する明確な意識を伴った構成になっているのである。また、No.13「竹」では、墨の濃淡で表現された竹枝の前後関係が竹林に奥行きを与えている。しかし、No.6「昔ばなし図」は、筆勢も No.4 に近く、近景の岩、中景の川と果物で鑑賞者の視線を遠景へと誘うものの、視線の到達点には遠山のスケール観を無視した巨大な柴垣が立ちはだかる。同図は、紙貼りによる修正も多く、先述の二図に比べて、全体の構成はややぎこちないものになっている。

一方、No.9「扇面流し図」は画面全体に配されたモチーフ同士の関連性が弱い点から大画面構図とは呼べず、奥行きも取り立てて強くは意識されていない。また、紙貼りによる修正も多数あるが、各扇面の構成や筆勢には一定の力量が感じられる。No.5「水流に小松、亀図」や、朱書きの訂正や刺繍や絞りといった小袖制作時の技法に関する指示の書き込みがある No.8「竹に鶯図」は、No.4 や No.13 と類似するモチーフが描かれているものの、モチーフの画面全体における関連性は弱く、奥行きにも欠けており、仕込み絵風である。

以上のように、下絵を連続した一枚のキャンバスに見立てた大画面構図のものから、既存のモチーフを適宜配置した仕込み絵風のものまで、構成や筆致に様々な相違があることから、6件が一人の手による下絵とは考えにくく、むしろ複数の手によって制作された可能性が高い。したがって、時代的にも江戸～明治にかかる期間も考慮する必要があることが伺われた。この観点から現存する『衣裳画』全件について再度検討する必要があると考える。

また、円山応挙の画業を確認し、三井家との関係の整理を行った。越後屋京本店と江戸店との関係について考察し、越後屋京本店の出入職人に関する研究史[3]の検討と問題意識の整理を行った。きもの完成までには様々な職人が関与するが、京本店では仕上加工に専属的に関わる職人とこれを管理する役所の存在が知られている。越後屋と円山派絵師との結びつきを考える手掛かりとなる上で、職人はどう組織され、どう仕事を請け負い、またどう手当てされていたかを考察してゆく必要があると考えた。

この他、『衣裳画』の旧状についての調査や、明治期の商家における婚礼の様相についての知見を得る為、京都・杉本家においての調査を行った。その結果、明治27年に制作されたことが明らかになっている同家所蔵の婚礼衣裳が時代考証に有効な資料であることがわかった。

## おわりに

前述の成果を踏まえ、来年度は大乗寺所蔵の19件の『衣裳画』の実見調査を行う。また、東京国立博物館所蔵の円山応挙筆「写生帖」と三井記念美術館所蔵の三井家旧蔵小袖の見学調査を行う。これらの調査から、美術史学の側面からは、他の原寸大小袖下絵の作例との『衣裳画』の比較や、所在不明の1件を除く25件全ての『衣裳画』の特徴を抽出し、分類する予定である。『衣裳画』筆致と、円山派絵師による屏風絵、襖絵などの下絵類の筆致の比較・検討を行うと同時に、応挙以降の円山派絵師と三井家の関連性、また円山派の絵師が小袖の下絵制作に従事した可能性、さらには円山派の画題の小袖意匠の中での展開について調査を行うこととする。一方、文献史学の側面からは、江戸から京本店への商品注文のあり方に関して、近世中後期の東西流通の事情もふまえながら検討してゆく。またこれに関わって、江戸・京双方に置かれた職人組織が如何なる構造のもと、如何なる分業をなして商品を製作していたかを考察する。

以上の美術史学側面の調査と文献史学側面の調査から、現在の我々が美術工芸品と目している「きもの」が当時の文化の中でどう位置づけられていたかを解き明かしていく。

## 文献

1. 白畑よし・切畑健著「三井家伝来圓山派衣裳画」, 紫紅社(1975)
2. 水尾比呂志:「円山応挙筆稲麻綿図」, *国華*, Vol.783(1957)  
 東京大学文学部研究室:「文部省平成元年度～四年度科学研究費補助金(一般研究A)研究成果報告書 狩野派を中心とする官学派の研究」「応挙と三井家」河野元昭, pp.21-54(1993)
3. 賀川隆行:「近世後期の越後屋の経営」, *三井文庫論叢*, Vol.9, pp.9-106(1975)